

MAX STUDY GROUP

Vol. 3 2015年12月5日

第3回 レポート

A テーマ設定

アクティブラーニング、第3回セミナーです。今回は私の模擬授業をベースにして、授業実践の考察と課題について議論しました。

B プログラム

1 アイスブレイキング

今回から冒頭のアイスブレイキングは参加者の持ち回りとなりました。初回を担当してくれたのは中霧先生と武藤先生です。

今回も数名新たな参加者を迎えるということで、自己紹介の要素を含めたアクティビティを用意してくれました。

まず、「この勉強会で呼んでほしい呼び名」をそれぞれ紙に書き、それを折りたたんで前の紙袋の中に入れます。私はふざけた名前にしようと思いつつも、結局いつもの「MAX」と書いてしまいました。我ながら、ちょっとひねりが足りなかったか(普段からそんな名前を使っている時点で十分ひねくれているかもしれませんが・・・)。

次に、このような質問が出されました。

24時間以内にあった「良かったこと」もしくは「新しいこと」は何ですか。

誰もが、「えっ？」と一瞬眉をひそめましたね。英語でも「What's up? / What's new(最近どう?)」という挨拶をよく使いますが、その答えは定型句のように「Not much./ Nothing much.(別に)」ですからね。しかも「良かったこと? 新しかったこと?」と考える以前に「そもそも24時間以内に何があったかな?」と近々の記憶すらあやふやなので、健忘症のように流れ去った記憶と感情を手繰り寄せるのに時間がかかりました。

では、今から紙袋の中から皆さんの呼び名が書かれた紙を選んでいきます。
まずは皆さんでその人を大きな声で呼んであげましょう。
そして呼ばれた人は、良かったこと、新しかったことを皆さんに発表してください。

紙が引き当てられるたびに、「せーの、〇〇！」と全員で声を合わせて呼びます。呼ばれた人ははにかんだり、手を上げたりして、発表していきました。

ちなみに、呼び名の中には「メガネ」「お嬢様」「〇〇にゃん」「はっぱちゃん」など、バラエティーに富んだものもあり、そのたびに苦笑も含めて笑いが起きていました。自分の名前に「〇〇さん♡」とマークを付けてしまう人もいて・・・ハートマークなり星マークなり、3人ほどいましたね。

発表は「久しぶりに安室ちゃんの歌声を聴いてしびれた」に始まり、「初めて道德の模擬授業をして、緊張した」「昨日の授業で試してみたアクティビティが結構うまくいった」という教師ならではのこともありました。また、「今日の昼食が麻婆豆腐だった」「通勤時間が短くなる乗り合わせが分かった」といった女子の小さな幸せもありました。「保育園のお迎えを姉に任せて、私はマッサージに行ってきた」という発表には多少周りからどよめきも起きましたね。

最後に、中鶴先生から今回のプランを企画した経緯を話していただきました。「嫌なことや愚痴はいくらでも出てくるけど、せつかくの勉強会だから、良いことを見つける、新しいことを見つけるという前向きな姿勢を大切にしたいと考えた。また、良いことを発表するのは少し恥ずかしいけれど、それをあえて言えるようにしたかった」とのことです。小さなアクティビティの中にも作成者の思いや仕掛けが入っているんだな、と改めて感心させられました。



とても和気あいあいとしたアイスブレイキングで楽しかったです。ありがとうございました。

2 アクティブラーニング 実践発表

今回は私が実践発表を行いました。前回の渡邊奈緒子先生の活動の要素を、実際に私が担当している英語の授業に組み入れた授業案を紹介しました(いずれ HP 内でも詳しく紹介をする予定です)。

授業の対象学年は中 1 で、Z 会の Treasure の教科書を用います。参加者の皆さんには生徒役になってもらい、私も英語で指示しながら実際の授業の流れを再現しました。

<活動の流れ 1: リーディングワーク>

- ① 各自 1 分で教科書にある英語の会話文を読む。
- ② ペアを作り、A と B を決める。A は Q1、Q3、B は Q2、Q4 を担当する。
- ③ 教員は、教室前方に Q1、Q3 が書かれた紙を、後方に Q2、Q4 が書かれた紙を設置する。
- ④ A、B ともに自分が担当する Questions を確認しに行く。覚えたらペアの元に戻り、パートナーと質問しあい、口頭で確認する。
- ⑤ 口頭での確認が終わったら、ペアで協力して Q&A をプリントに書き入れ完成させる。その間、教員は 4 つのペアを選び、黒板にそれぞれの Q&A を書かせていく。
- ⑥ 生徒の答えをもとに、全体で内容を確認する。その際、文法も活動の趣旨に合わせ、必要に応じて直していく。

<活動の流れ 2: ノートテイキング & サマリー>

- ① 本文の情報を整理し、キーワードを抜き出して英語でプリントにまとめる。
・まだ中 1 なので、「どうやってまとめようか」と生徒に質問を投げかけつつも、教師がリードし、表を作成することにする。全体でフォーマットを決めた後、各自ノートにまとめていく(5 分程度)。
- ② ペアを組み、①で仕上げたノートをもとに、自分の言葉で本文の内容をパートナーに説明する。ペアを変えて、何回か同様の練習を行う。



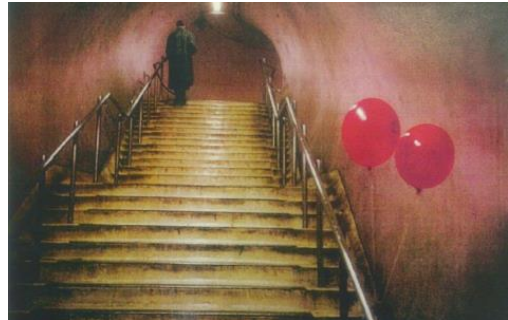
ペアでのオーラルワーク、ノートテイキング、サマリー発表などは、従来から私の授業で中心的に行っているものですが、対象者がこれまでの女子高校生から男子中学生に変わる中で、その特性を踏まえて修正し、渡邊先生の活動の要素を取り入れながら、このようなアクティビティを設計しました。

これまで 2 回ほどこの形で授業を進めています。男子中学生を教室内を移動させていくのは、コントロールも大変ですし体力もいりますが、英語活動としては良く機能しているのかなと感じています。

3 アクティブラーニング ワークショップ

前回できなかった私のアクティブラーニング模擬授業の発表、共有を行いました。

例によって、右の写真です。詳しい模擬授業の内容、説明はホームページで近々に(今冬中に)ご紹介いたしますので、詳細は割愛します。



ポイントとして挙げたのは3点です。

- ① 中3の英語の授業として、どのように4技能を統合して授業を進めるのか。
- ② 中3の英語の授業の中で、どのレベル、どの部分の課題解決に取り組ませるのか。
- ③ この授業の前に行った「事実分析」を、どのように活かすのか。

授業の流れだけでなく、どうしてそのような設計をしたのか、課題解決プログラムのモデルを提示しながら、プランナーとしての考え方も共有させていただきました。

4 ディスカッション

最後に2つのディスカッションクエスチョンを提起しました。

- Q1: アクティブラーニングを設計する際に、どのような観点が大切なのか、また、どのような活動が「良い」活動なのか、判断基準となる要素を考えてください。

ここでは以下のような意見が出されました。

- ・ 全員が積極的に参加できる。
- ・ 協力なしには完成しない。
- ・ 考えることを求めている。
- ・ 思考力が段階的に上がっていくこと。
- ・ 課題解決ができること。
- ・ 答えが複数出る余地があること。答えが決まっていないこと。
- ・ 知識のインプットと思考のバランスが取れていること。
- ・ 何かを生み出すこと。



Q2: アクティブラーニングの実践における課題、ハードルは何ですか。

「そうは言っても、実際にやるとなると…」という部分がやはりあるわけです。実際に現場に立つ教員として、率直に感じる課題を出し合いました。全ての議論を書くのは不可能ですが、以下に提起された疑問点や課題を掲載します。面白いディスカッションでしたので、今後 HP でも執筆をしたいと考えています。



(1) カリキュラム

- ・ カリキュラムのどの箇所に、どのような活動を入れていくのか、調整しなくてはならない。
- ・ シラバス、教科書の進度をどのように設定するのか。
- ・ 全教科が AL になると、生徒の負担が大きい。特にプレゼンやレポートを同時期に課すと、つぶれてしまうのではないか。
- ・ 核となる AL プログラムを決める必要があるのでは。
- ・ 総合学習の時間をしっかり組み立てることがカギではないか。
- ・ この方法で、本当に大学受験に対応できるのか。実際、教師も生徒も不安になってしまう。
- ・ 入試が変わるとはいえ、突然 AL に舵を切ってしまうと、実際には困ることも対応できないことも多いのではないか。
- ・ 現行の授業とのバランスを取らなくてはならない。

(2) カリキュラム・授業設計

- ・ 準備に必要とする時間、負担が大きい。
- ・ 限られた授業時間の中で、一貫性のあるプログラムをどのように作るのか。
- ・ 1 クラスあたりの生徒数が多い中で、全員が動くような授業をどう設計し、マネジメントとするのか。
- ・ 教科や教材によって、AL の親和性や教育効果が異なる。
- ・ 知識のインプットと活動のバランスをどのようにとるのか。
- ・ 教員のタスク設定がしっかりしていないとグダグダになる。

(3) 教員の授業力

- ・ 生徒を活動にうまく導けるかは、教員の力量によるところが大きい。
- ・ 特に横並びで行う授業では、教師間の力量、モチベーションの差がどうしても出てしまう。授業の質や公平性をどのように担保するのか。
- ・ こちらが意図していることに必ずしも生徒がついてくるとは限らない。
- ・ 学力、学習能力、吸収力に個人差がある場合、どのように対応するのか。

C 次回に向けて

これまで 3 回にわたりアクティブラーニングのセミナーを行ってきました。もちろん今後も議論を継続していきますが、全体的なテーマとしてはここで一度終え、次のテーマに移りたいと思います。

先日、渡邊大輔先生、米倉先生と 3 人でこの勉強会の企画部を結成し、企画会議をすることにしました。他の参加者の方にも意見をいただく中で、今後のテーマ設定、プログラム作りを検討していきます。

まだ具体的には決定していませんが、「グローバル、異文化」もしくは「テストと評価」というテーマに入ろうかと考えています。3 回にわたり、考えることに重きを置いたワークショップだったので、今回は一度あるテーマに沿ってレッシンプランを作り、発表するというのも良いかと思っています。

D REVIEW & REFLECTION

米倉先生

今回の勉強会で印象に残ったことが 2 点あります。1 点目は、関先生の AL 模擬授業ですが、課題解決型アクティブラーニングを実現した授業であり、英語の 4 技能を伸ばすコミュニケーションな授業でもありました。それだけでなく、授業レベル設定や、前時との接続といった制約をクリアしながら実現しているところも伝わりました。これまでの勉強会で学んできた AL のフレームワークに当てはめて考えると、活動軸(X軸)、思考レベル軸(Y軸)ともに高く、両側面からAL度の高い授業と分析できます。また、発想も柔らかく、お題の写真を課題解決後のものとして解決前の課題を考えさせるタスクを思いついたのは、ダイナミックな発想の転換でした。関先生が勉強会後の反省会で「本気で作った」と言っていた気迫が伝わる授業でした。

2 点目は、AL の問題点、課題です。学校現場で AL の導入が叫ばれ、進んでいますが、「実際に全ての教科でそのような型の授業を導入したらどのようなことになるのか」について考えてみたことはありませんでした。朝から放課後までALの授業になってしまうとそれはそれで生徒が疲弊してしまうことが想像できます。また、課題などの提出が多教科で重なった場合も生徒の負担は非常に大きくなってしまいうでしょう。受験で問われる力に対応できるのかという根本的な問題についても改めて考えさせられました。

「アクティブラーニングについて、アクティブラーニングで学ぶ」という入れ子型のワークショップ、いつも楽しく参加させてもらっています。他教科の教員との意見交換も非常に有意義に感じます。また、参加者の思考も鍛えられるという一石三鳥の勉強会だと感じています。私も企画運営側の 1 人として、新たな教育課題の探求、そして試行錯誤を皆さんと一緒にしていきたいと思っています。

小俣さん

今回初めて参加させて頂きました。教育関連企業で、コンテンツ(アプリや映像、ウェブサイト等)の企画開発を担当しております。

アクティブ・ラーニングのディスカッションに参加させて頂いた中で特に強く感じたことは、「絶えずインプットとアウトプットを繰り返していくことの重要性」でした。アクティブ・ラーニングについては、言葉がメディア等を通じて拡散しており、様々な情報をインプットする機会は増えてきた一方で、授業実践において実際どのように利用される手法か考える機会は、残念ながらこれまでありませんでした。

そのような中で今回、日々授業実践をされておられる先生方との対話を通じ、手法や課題をめぐってアウトプットできたことは大変刺激的でした。アウトプットの間があることで、より意識的にインプットをすることとなり、またインプットの質も向上してゆくものと感じています。

合わせて、アクティブ・ラーニングで使用される教材の構成や質について関心が高まりました。もしかして教科書がいらなくなるのでは？などと極端な見方もできるかもしれませんが、こうした見方も含め、これまでの教材観(教師が主導して使用するもの)から変化してゆくのか否か、注視が必要と感じます。あるいは、これまでと変わらない黒板・教科書・ノートという学習環境でも十分成り立たせ得る手法であるから、特段教材は変わらないのかもしれませんが。いずれにせよ、教材作成側が備えておくべきマインドセットについても議論の場があると良いと感じました。そして、その議論を基に実際に教材開発などもできれば、それは素晴らしいアウトプットとなるのではないかと期待が大きくなっております。